

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01464

研究課題名(和文) ムスリム女性移住労働者の国際移動とオートノミーに関する比較実証研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of International Migration of Muslim Women Workers

研究代表者

中西 久枝 (Nakanishi, Hisae)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授

研究者番号：40207832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：イスラーム世界の女性が国際的に移動し、ホスト社会で労働することによって自己裁量権をどのように拡大したかという問いに対し、4つの事例研究を通じて、自己アイデンティティの変化と自己裁量権のあいだの関係性を分析した。その結果、移住前の教育レベルや移住の動機付けや移住先の社会的絆及び社会資本が女性移住労働者のオートノミーの拡大・縮小に影響していることが判明した。女性たちはそれぞれの移住先において、ムスリムとしての意識を他のアイデンティティの基軸と併存させつつ、時としてムスリム時として民族性、時には出身地域をもとにした相互補助の精神によってサバイバル・ストラテジーを展開している実装が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ムスリム女性移住労働者についての固定観念を打ち破り、個人あるいは集団としての移住プロセスがいかにムスリムとしての自己認識を強化したり弱めたりしつつ、自己の生活圏を拡大しているか、あるいは縮小しているかを具体的に描いた。ムスリム人口が世界的に増え続けているなか、ムスリム女性の自発的な動態と活動を「労働」という側面から捉えることでとかく他者によって決定されがちなムスリム女性像のイメージを払拭することによって、本研究は、世界的に増えているムスリムと非ムスリムのあいだの共生のありかたを提示することを目指した。

研究成果の概要(英文)：The four case studies were conducted by four researchers. We found out that women's background in the level of education, social network, group-based solidarity among migrant women, and reciprocal engagement with their host societies determine the degree of women's capability in exercising autonomous power. Our study also found out that women migrants developed their own survival strategy in their host societies by utilizing group cohesion that is based on ethnicity, Muslim identity, and commonality in their place of origin. It is also found that women often seek more conviviality when Muslim women migrate to Muslim majority states from Muslim minority states. On the other hand, secular-minded Muslim women seek to migrate to Muslim minority states to be away from patriarchal control when they felt it in the state of origin.

研究分野：トランスナショナルな人の移動

キーワード：トランスナショナル オートノミー ジェンダー アイデンティティ 国際移動

## 1. 研究開始当初の背景

世界の総人口の5人に1人がイスラーム教徒(ムスリム)である今日、ムスリム移住労働はグローバルに増加している。彼らはホスト社会での市民権の有無に拘わらず、人的、社会的ネットワークを構築しつつ、「共生の生存空間」を創造している。一般的に「ムスリム女性の移動は、イスラーム法やイスラーム的規範に拘束され不自由である」とされている。また、ムスリム女性は、一般的にイスラーム法やイスラーム的価値観による影響から、移動の自由が男性より小さいと言われている。女性のヴェールやスカーフはその象徴だと言説が、学术界でも実社会でもいまだに根強く残っている。だが、出身国を離れて移住するムスリム女性たちは、果たしてそうしたイスラーム的な規律からの解放を求めて移住しているのだろうか、本研究は、ムスリム女性労働者のオートノミーが発揮される場として、移住先のコミュニティを「移動的共生圏」(Mobile Commons)の理論(Papadopoulos, "After Citizenship," 2013)に照らし合わせて捉え、ホスト社会との接点としての「共生圏」の実態を明らかにする。

## 2. 研究の目的

本研究は、移住の前後でムスリム女性移住労働者のオートノミーがどう変化したかを分析する。オートノミー(自律性や自己裁量権)は、移動の自由、就労あるいは収入向上活動への参画の決定権とその行使、自分の財産(土地、貯金、投資)へのアクセスとその運用、の3つの項目について、聞き取り調査を行う。また、オートノミーの変化とムスリム・アイデンティティとの連動性についても、事例横断的に分析する。本研究は、女性の移住パターンを2つに大別して比較研究する。一つは、ムスリム多数派国家からムスリム少数派国家への移住、もう一つは、その反対である。前者として、イラン及びパキスタンから欧米への移住、後者としてタイ深南部からマレーシア、中国新疆ウイグル自治区からトルコへの移住である。これらの事例研究を通じ、移住の動機、移住後のイスラーム法の適用や移住の社会的、文化的親和性の観点から、女性のオートノミーの拡大や縮小について移住の前後の変化を分析する。

## 3. 研究の方法

研究方法は、主として3つに分かれる。第一の方法として、現地調査に基づき、ムスリム女性たちがそれぞれの事例において、どのように移住を成し遂げたか、またそのプロセスを分析する手法である。西は、マレーシアに移住したタイ深南部の女性について、中屋は、トルコに移住した新疆ウイグル人女性について調査を実施する。中西は、カナダに移住したアフガン難民女性についての聞き取り調査を行う。第二の手法は、移住に伴い、ムスリム女性がいかに自己裁量権を発揮しようと捉えているか、アンケート調査や文学作品を通じて解読するものである。山根の研究では、パキスタンでアンケート調査を実施し、女性たちが移住後の行動規範や実際の生活圏についてどのような捉え方をしているか、その決定要因は何かを分析する。中西のイラン人女性移住コミュニティに関する研究では、ディアスポラ文学を通じて、イラン人女性移住者が自己アイデンティティとどう向き合いつつ、ホスト社会と出身社会とを往復したのか、あるいは移動したのかを解釈する。

## 4. 研究成果

### (1) トルコに移住したウイグル女性の事例

本事例では、宗教的束縛からの解放を求めてではなく、むしろイスラーム的な規律を求めて越境していることが明らかとなった。その背景には、中国の共産党政権が一般に資本主義国家で観察できるような私的領域の信仰の自由すら認めなくなり、公的領域、私的領域にかかわらず宗教を排除し世俗化を図ろうとしている点がある。特に2009年のウルムチ事件以降、子供の躾・教育など家庭内で役割を担うとされる女性にイスラーム的服装の統制や非ムスリム地域への出稼ぎをさせることなどによって世俗化を推し進めていたことを明らかにした。さらには、政府は宗教に関する法令の整備を急速に進めて宗教統制を強化している。世俗化を推し進めることをした結果、却ってウイグル女性は仕事を辞職し、経済的活動の場を失っていくことがわかった。トルコに移住後のウイグル女性は、女性のみが出入りできるバザールを創設し、その女性バザールで店を設ける、自宅で裁縫店をするなど女性のみ我的生活空間を宗教的空間として創造していることが明らかになった。宗教的空間の拡大がウイグル女性の経済的活動範囲の拡大に比例していることが分かった。したがって、本研究の主題であるムスリム女性の自己裁量権はイスラームによって狭められているのではなく、イスラームによって逆にムスリム女性の自己裁量権を高められていることが明らかとなった。

### (2) タイの深南部からマレーシアへ出稼ぎした女性就労者の事例

本事例では、出稼ぎをする女性の職業選択は、学歴やタイ語運用能力に影響を受けていることが明らかになった。インタビュー対象者の9割近くが通称トムヤム店と呼ばれるマレーシアのタイ料理店で働いていたが、そのうち4割が小学校、5割が中学校、1割が高校を卒業していた。タイ料理店を選択した背景には、学歴の低さからタイでは高収入の仕事に就くのが困難である

こと、言葉や文化の近さ、すでに出稼ぎに出ている親族や友人の存在が挙げられた。大卒の女性については、タイ料理店のオーナー、従業員であった女性2名を除き、ほとんどが企業で働いていた。大学卒の女性にとってマレーシアで働くことは、海外で経験を積むこと、タイへの帰国後のキャリア形成や独身の場合は配偶者探しに資するものとして捉えられていた。

いずれの場合においても、マレーシアという行先を選択した理由として、マレーシアがムスリム国家であることがしばしば挙げられた。地縁、血縁のネットワークがあること、マレーシアがムスリム国家であることが、単身を含む女性の移住の決定に対してポジティブな影響を与えている。とりわけタイ料理店のネットワークは、学歴やスキルの無い女性にとって経済的・社会的エンパワメントのための選択肢として機能していることが明らかになった。

#### (3) パキスタン社会での女性の就労に関する意識調査

本事例では、山根は、同国の高学歴の修士課程の女子学生を中心にデータを集めた。これは、海外での就労に対する関心の高い女性に焦点を当てることとなった。親せき等が海外に在住している場合が半数近くに上り、海外で就労してみたいと考えるケースが50%近くに上りた。また親戚の多くが教育機関等で自身の能力を活かした就職を求めている結果となった。また、希望する渡航先は欧米や日本で、中東諸国や中国などはほとんどなかった。他方、海外で就労する場合にヴェールを着用するか否かについては、半数近くがヴェールを着用すると答えると同時に、「なぜ着用しなければならぬのか」といった否定的な見解もあった。海外、特に欧米という環境が、パキスタン社会と比較してイスラーム的価値観についてより世俗化されたイメージを持っていることが明らかになった。

#### (4) カナダにおけるアフガン人コミュニティのアフガン女性難民の事例

本事例は、現地のアフガン難民のNGOワーカーに聞き取り調査を依頼して得られた結果を分析したものである。中西は、その調査結果を分析し、カナダに渡ったアフガン難民の女性たちがいかにホスト社会に溶け込み、就労の機会を得ることができるかあるいはできないかという境界が、移住前のアフガン社会で受けた教育レベルにあるとわかった。識字がないままカナダに渡った女性は、子どもが病気になったときに病院でコミュニケーションする能力にも事欠き、生涯教育プログラムで英語を数年間学んでも英語をマスターするのがむずかしい事例もあった。他方、中等教育以上の教育を移住前に受けていた女性たちは、看護師など専門性の高い職業に就くことができた場合が観察された。カナダ社会でどこまでヴェールを着用するかという点については、高度な専門職に就いた女性ほどヴェールを着用しないことを選択し、家庭での家事や育児に従事することに専念した女性たちのあいだでは、アフガニスタンに居住していたときと同様にヴェールを着用する傾向が見られた。

(5) イラン人のディアスポラ女流文学に見られる、自己裁量権の行使への認識に関する研究  
本事例では、いわゆるイラン人ディアスポラの中でも特にイラン人人口が多いロサンゼルスを中心に、欧米に移住したイラン人女性が職業を通じ、ホスト社会において自分たちの生活空間をいかに拡大したか、イランとホスト社会を往復する女性たちは、イラン政府が義務化したヴェールの着用をいかに受容あるいは反発しつつ、日常生活のイスラーム的行動規範に抵抗したかといった観点から、文学作品を3点取り上げ分析した。その結果、ディアスポラ文学の中で描かれているイラン国内の政治変動としては、1979年のイラン革命、2008年から2009年にかけての百万人署名運動や緑の運動が大きいことがわかった。こうした政治社会変動を経験しつつ、欧米への移住後は、女性たちはホスト社会におけるイラン人への差別的視線や意識を感じ、イラン人であることを公言することを躊躇する傾向がある。そこにはムスリム女性という意識よりはイラン人女性であることへの葛藤が存在することがわかった。他方、文学作品の著者がイラン社会とホスト社会との間を行き来する場合は、ホスト社会に短期的に帰国した際、イラン社会の中に存在する家父長制的な価値や規範に基づく女性の行動への規制を強く感じ、移住先の欧米で当たり前として行使できた移動や行動の自由とのギャップを再認識する状況が描かれている。以上のそれぞれの事例研究が、本課題全体で提示しているのは何かという点については、現在成果公開のための本の共同執筆作業の中でとりまとめている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 西直美	4. 巻 11号
2. 論文標題 イスラーム的価値観をめぐる相違と「過激化」問題：タイ深南部におけるサラフィー主義の受容に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一神教世界	6. 最初と最後の頁 34-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山根聡	4. 巻 90
2. 論文標題 印パ対立からみたパキスタン情勢における軍と司法のバランス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紀要 国際情勢	6. 最初と最後の頁 115-128.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中西久枝	4. 巻 16
2. 論文標題 イラン・アメリカ関係がイランの女性運動に与える影響 アフマディネジャド政権期から現在まで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一神教学際研究	6. 最初と最後の頁 75-93.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中屋昌子	4. 巻 16
2. 論文標題 社会主義政権下中国におけるイスラム復興：新疆ウイグル自治区を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一神教学際研究	6. 最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamane.So	4. 巻 11
2. 論文標題 Muslim Writers and Food in North India, 1850-1920: Nostalgia and Uneasiness	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of South Asian Studies	6. 最初と最後の頁 18-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西直美	4. 巻 16
2. 論文標題 タイ南部国境地域におけるイスラーム復興のねじれ現象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一神教学際研究	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中西久枝	4. 巻 12
2. 論文標題 『女性・命・自由』抗議デモはなぜ起きたか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 211-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 93
2. 論文標題 パキスタンにおける政権交代と国民の分断	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 紀要 国際情勢	6. 最初と最後の頁 143 - 154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 58
2. 論文標題 地域研究から地域間研究、外国学研究へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ExOriente	6. 最初と最後の頁 9-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Hisae Nakanishi
2. 発表標題 Reconsidering Inclusive Growth and Gendered Economic Security: Toward Constructing Research Agendas
3. 学会等名 第4回南アフリカ日本大学フォーラム (SAJU) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hisae Nakanishi
2. 発表標題 Religions and Peacebuilding: Some Views from the Middle East
3. 学会等名 G20 Interfaith Forum, Tokyo: People, Peace, Planet: Pathways (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hisae Nakanishi
2. 発表標題 Some Views on the US-Iran Tension
3. 学会等名 International Conference on The New Political and Energy Shifts in the Middle East: A View from Japan, (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山根聡
2. 発表標題 カシミール問題を発端とする国際情勢とパキスタンの現状
3. 学会等名 中東情勢研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naomi Nishi
2. 発表標題 Sectarian Affiliation as Experienced in a Remote Village of “ Supporters ” : A Case Study of Ruesot district, Narathiwat province
3. 学会等名 Thai Case Studies in Localizing the Global, Chulalongkorn University, (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西直美
2. 発表標題 イスラームの価値観をめぐる相違と「過激化」問題：タイ深南部を事例として
3. 学会等名 同志社大学人文科学研究所第4研究第5回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中屋昌子
2. 発表標題 ウイグル女性におけるイスラームと社会主義
3. 学会等名 同志社大学フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センター主催 夏期講座
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西久枝
2. 発表標題 アメリカとイランはなぜ対立するのか
3. 学会等名 －神教学際センター（CISMOR）公開講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中屋昌子
2. 発表標題 社会主義政権下中国におけるイスラム復興：新疆ウイグル自治区を事例に、アジアにおけるムスリムマイノリティのイスラム復興
3. 学会等名 CISMORリサーチフェロー研究会 同志社大学
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西直美
2. 発表標題 タイ南部国境地域におけるイスラム復興のねじれ現象、アジアにおけるムスリムマイノリティのイスラム復興
3. 学会等名 CISMORリサーチフェロー研究会 同志社大学
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 NAKAYA Masako
2. 発表標題 The Muslim Network and Philanthropy in Turkey
3. 学会等名 CISMOR RF Workshop on Revisiting Turkish Soft-Power: The Power of Islam or Neo-Ottomanism?
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 NISHI Naomi,
2. 発表標題 Women's Autonomy and Islam: A Case of Nanyu Female Workers in Malaysia
3. 学会等名 CISMOR Research Fellow Workshop by Young Scholar on Perspectives to the Structural Problems in the Deep South of Thailand-Conflict Resolutions, Gender and Migration Networks
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西久枝
2. 発表標題 イスラーム世界のジェンダー観 男女分離を中心に
3. 学会等名 富阪キリスト教会兵役拒否・平和主義・エキュメニズム」研究会（オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中屋昌子
2. 発表標題 トルコにおけるウイグル女性の宗教的商業ネットワークについて
3. 学会等名 同志社大学FGSSセンターグローバル社会と移民研究会（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中西久枝
2. 発表標題 カナダにおけるアフガン難民女性と社会参加ーハミルトンシティの事例から
3. 学会等名 同志社大学FGSSセンターグローバル社会と移民研究会（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西直美
2. 発表標題 タイ深南部におけるムスリム女性の移民経験とジェンダー
3. 学会等名 同志社大学FGSSセンターグローバル社会と移民研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中西久枝
2. 発表標題 イランの抗議デモに見る中東ユーラシアの地政学 ウクライナ戦争の影響
3. 学会等名 同志社大学一神教学際研究センター公開講演会(オンライン)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 中西久枝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 260
3. 書名 「イランの女性運動 活動家の言説から」(第5章)『越境する社会運動』(長沢栄治監修、鷹木恵子編著)イスラーム・ジェンダースタディーズ 第2巻 (分担執筆 pp.73-84)	

1. 著者名 西直美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 260
3. 書名 「コラム8 ヒジャブの陰で：タイ南部バタニ女性たちの挑戦」『越境する社会運動』(長沢栄治監修、鷹木恵子編著)イスラーム・ジェンダースタディーズ 第2巻 (分担執筆、pp.187-189)	

1. 著者名 山根聡	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 (現代地政学事典編集委員会編) 現代地政学事典(634-635)	

1. 著者名 Hisae Nakanishi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 646
3. 書名 Suad Joseph ed. Encyclopedia of Women in Islamic Cultures Vol.8 Literary Studies, Media and Communication (分担執筆、pp.20-33)	

1. 著者名 西 直美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 280
3. 書名 イスラーム改革派と社会統合	

1. 著者名 山根聡	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 (八木久美子、阿部尚史、澤永文子、澤井充生編著) イスラーム文化事典(分担執筆、pp.20-33)	

1. 著者名 中屋昌子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 (八木久美子、阿部尚史、澤永文子、澤井充生編著) イスラーム文化事典 (分担執筆、pp. 88-89, pp. 172-173)	

1. 著者名 西直美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 (久志本裕子、野中葉編著) 東南アジアのイスラームを知るための64章』 (分担執筆、pp.208-213, pp.264-268)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中屋 昌子 (NAKAYA Masako)  (30838850)	同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員  (34310)	<a href="https://cir.nii.ac.jp/crid/1520290884912162048">https://cir.nii.ac.jp/crid/1520290884912162048</a>
研究分担者	西 直美 (NISHI Naomi)  (50822889)	同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員  (34310)	<a href="https://cir.nii.ac.jp/crid/1520572359889388032">https://cir.nii.ac.jp/crid/1520572359889388032</a>
研究分担者	山根 聡 (SO Yamane)  (80283836)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授  (14401)	<a href="https://doi.org/10.11384/ijisas.1007">https://doi.org/10.11384/ijisas.1007</a>

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Half Century of Iranians in America-Generational and Gender Differences	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------